まいあーと■ 石絵「内裏雛」by. 久住由美

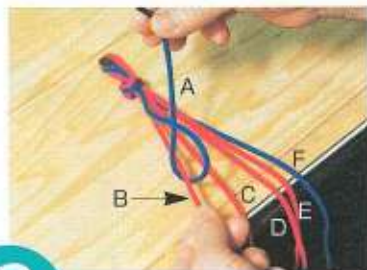
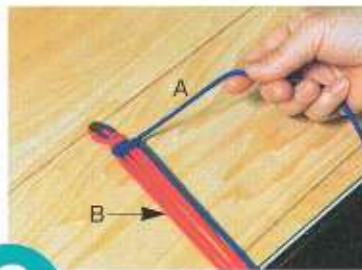
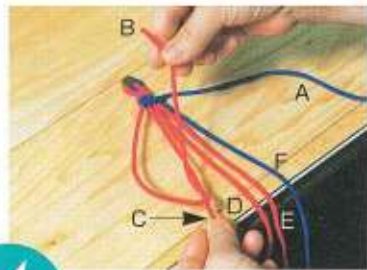
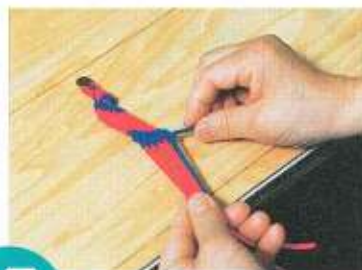
くらふと画報② 協力：立川市クラフト同好会

プロミスリング

糸と結び目の小さな芸術「聖なる輪」

手首に結んで、いつかそれがちぎれた時に願い事が叶う…。インディアンのおまじないとして伝わるプロミスリングは、別称“ミサンガ”とも呼ばれ、若者の間では既にポピュラーな存在。刺繍糸を使って誰にでも手軽に作れるのが魅力だ。今回教わったのは基本の型だが、糸の色や本数を変えれば様々なバリエーションが愉しめる。「結び目はきっちりと、比較的きつめに結ぶこと。力の入れ具合が異なると出来上がりの形がゆがんでいたり、切れやすくなったりします」（神田さん）。

今月の先生
神田清子さん（柴崎町）

1 約120cmに切った糸3本を二つ折にし、折端を結んで輪を作る（写真は太目の紐を使用しています）。

2 輪の部分を固定し糸を平らにばらす。左端Aの糸を右手に持ち、写真のようにB糸に2回結びつける。

3 ②の作業を順にF糸まで行う。やり終った時点でA糸が右端に、B糸が左端にきていることを確認。

4 今度はB糸を使って②の作業。C糸からA糸まで同様に行う。少々きつめに結ぶと型くずれしない。

5 B糸が終わったらC糸…と、順に繰り返す。ようするに、左端の糸が「編み糸」になるという仕組み。

6 適当な長さまで編み終ったら、糸を3本づつ分け「三つ編み」に結んで完成。

えくてびあんレポート

たちかわギャラリー巡り

まちのオアシス八景

昔から立川人は、アートの持つ力に敏感であった。
かつての『立川画廊』や『四季』などは、わが街を代表する名ギャラリーとして親しまれていた。
モノレールの登場とともに新しく生まれ変わる風景、
それでもちょっと歩けばこれだけのギャラリーに出会える。
その道の人ならずとも、気軽に立ち寄ることができる贅沢。
索漠とした日々に欠かせない、私たちのオアシスだ。

●ぎゃらりー 繭（西砂町５丁目）
あの「窯焼きパン」の鈴木さんご夫妻が開いた新ギャラリー。オープンは昨年だが、今や西砂文化圏の中心的存在。

●たましんギャラリー
（曙町２丁目／たましん本店ビル９F）
多摩地区出身の芸術家の作品を多く所蔵。いつ行っても損はない手堅い企画で、わが街の美術史を語る上でも外せない。

●マグノリアホール
（曙町２丁目／ルミネ１F）
買物ついでに立ち寄れる気軽さがいい。絵画でも彫刻でも、広々としたスペースは用途を選ばない。

●スペースエヌズ
（錦町１丁目／NSNビル４F）
南口に独自の存在感を放ち続けて４年目。本格指向と凝った企画は、感覚の鋭い立川人に着実にアピールし続けている。

●ルミネギャラリー
（曙町２丁目／ルミネ６F）
ルミネ内にあるもう一つのギャラリー。わが『ベスト立川人・展』も例年こちらで。

●新紀元（曙町２丁目／カクニビル４F）
北口駅前、紫芳会クラブ「時代舍」として立川文化をリードしてきた証しが、洗練されたアトモスフィアに現れている。

●ギャラリーフロム
（曙町２丁目／フロム中武６F）
小さいながらも、ファインアートのみならず、幅広い指向の企画で楽しませてくれる。

●朝日ギャラリー（曙町２丁目／ルミネ９F）
「朝日カルチャーセンター」とリンクした展示がメインだが、駅ビル"ウィル"時代から、多くの市民に愛されてきた名物ギャラリー。

えくてびあんの輪

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は幸町(B)・錦町・羽衣町・柴崎町(A)のお店です。

シリーズ この人と1時間⑱

すべてはアートのため。コレ、私の道ですヨ。

彫刻家／美容院「サロン・ケベクア美容室」オーナー

クロード・デコートさん

〔プロフィール〕
■クロード・デコート：カナダはケベック出身。18才で故郷を離れ、単身パリに渡る。その後エジプトで2年ほど過ごした後、ケベック政府のスカラシップ（奨学制度）を取得し、昭和44年、京都美大（現・京都芸大）に入学。本格的に彫刻の道に入る。5年間を京都で過ごし、インドのタゴール大学に留学。2年後、再び日本に戻り、各地で個展・展覧会を開催。昭和55年3月、より彫刻の道に専念すべく、高松町3丁目に美容院「サロン・ケベクア美容室」をオープン。その経営を基に、精力的な創作活動を続けている。趣味は料理、ダンスなど幅広く、剣道は四段の腕前。自宅アトリエは国立市にある。60才。
■立井啓介（たていけいすけ）：月刊えくてびあん編集人。

高松町3丁目にある美容院「サロン・ケベクア美容室」。こぢんまりとはしているが、不思議な統一感がある店内はなんとも居心地の良い空気に満ちている。が、初めてここを訪ねる人はまず驚くだろう。各々の仕事を笑顔でこなすスタッフの間を縫って、突然、鏡越しに「イラッシャイマセ」と碧眼の紳士が現れるのだ。

クロード・デコートさん。カナダはケベック市出身。十代の頃から世界を遊学し、京都芸大で彫刻を学んだアルティスト（芸術家）だ。19年前にこの店を開店、現在はその経営を基盤に創作活動を行っている。日仏二ヶ国語（ケベックは仏移民でできた町）がとびかう対談となったが、ムッシュ・クロードの魅力は圧倒的。肌の色や言葉の枠を越えた「パーソナリティ」の力というものを改めて感じる快談であった。

立井 クロードさん、彫刻は京都で勉強されたんですか。

クロード そう、京都美大（現・京都芸大）で。京都には五年間いましたね。

立井 それがどうしてまた、美容院なんですか。

クロード 彫刻はとても売りにくいです。京都の同級生も続けている人は少ないね。でも私は絶対やめたくないから、お店を持って、それを誰かに任して、自分は彫刻をする「自由」を持ちたかった。

立井 なるほど、いわばレストランのパトロンのようなものですね。クロードさん自身も、美容師をされるんですか。

クロード 私はできない。経営だけ。お店では掃除とか、お手伝いですね。

立井 それじゃいろいろ大変でしょう。難しいことはないですか。

クロード 私は美術のために日本にいるから美容師はやらない。でもお客さんの髪型、この顔にはこういう髪が似合うということは云います。

立井 レストランのオーナーも料理はしないけど、味はわからないと務まらない。それと同じですね。

クロード それに、良いスタッフに会えたのが幸せ。3人いるんですが、みんな素晴らしい人ですね。だから安心。何の心配もない。

立井 そうですか。ところでムッシュ・クロード、失礼ですがお年を聞いてもよろしいですか。

クロード 私？ スワサンタン！

立井 え、スワサンタン（60才）？ ホントですか。全然見えませんよ。

クロード 私も日本人の年、わからないですね（笑）。私、剣道やってます。7～8年前に始めて、今は四段ね。

立井 四段ですか、そりゃすごい。

クロード 剣道は姿勢が大切。だから健康にいいんです。病気はしたことないね。それに土曜日は六本木に踊りに行く。日本人は40才ぐらいになると、誘っても誰も行かない。恥ずかしいと云って。年は関係ないのにね。

立井 ご結婚はされてるんですか。

クロード してないですね。全然興味ないね。奥さん、子供はおジャマ虫。

立井 おジャマ虫ですか（笑）。日本人の発想からすると、結婚していないと、半人前だとか未熟だとか云われてしまうんですよ。

クロード 女性は好きです（笑）。でも家庭はいらない。私の家族は彫刻、作品が子供ね。

立井 でも人間には子孫を残すという役割があるでしょう。クロードさんが今いるのも、お父さんお母さんがいてくれたおかげなんだから。

クロード そうですねえ。でも私、兄弟は17人もいるんですね。

立井 17人兄弟！ 大家族だ。

クロード だから子孫とかの心配はいらないね。みんなたくさん子供いるから、もう充分。私は作品の方が大事！

立井 驚いたなあ。僕の周りにはこういう人は中々いないです（笑）。

クロード 珍しいね。トゥレラール（変わってる）って云われます。でもそれが自分の生き方ですから。私の兄弟の中でアルティスト（芸術家）は私だけ。他は神父さんとか、法律家とか、医者とかね。だからはじめは私の仕事は、可哀想って云われました。

立井 ああ、アルティストの仕事は、他より低く見られてしまったんですね。

クロード でも私、全然そう思わなかった。今ではみんな、私のこと羨ましいって云います。だから自分の生き方をするにはクンレンが必要ね。

立井 クンレン？ ああ、訓練ね。そうですね、自分を貫いていくにはエネルギーがいる。

クロード そう、だからエネルギーがある人が大好きですね。エネルギーを持っている人はすぐ感じるね。そういうがんばっている人と友達になりたい（笑）。

立井 たとえば、クロードさんのエネルギーの素には、信仰の力が大きいんじゃないですか。

クロード 私の家はカトリックですが、全然興味ない。教会も行かないね。自分の教会は自分のアトリエ、そこで毎朝必ずお祈りするんですね。でも苦労してる時、辛い時に、神にお願い事はしない。自分でがんばる。神様には「ありがとう」だけ、ね。どうしてかというと、みんなが願い事するから、神様忙しいでしょ。

立井 ハハハ。自分の気持ちを神様に感謝するということですね。

クロード そうです。彫刻していて難しくても、大変でも、絶対神様に頼らない。完成した時に「ありがとうございました」とお礼をする、ね。

立井 京都にいた時は、周りに古いお寺が多かったでしょう。日本の仏像なんかはご覧になりましたか。

クロード 見ました。仏像は大好きです。とてもきれいだし、お寺は静かでいい気持ちになります。私はね、日本の仏教の哲学はとても好きですね。なぜなら「自然」に近いから。

立井 ああ、そうかも知れませんね。仏教の教えにはそういうところが確かにあります。

クロード これは日本に来て初めて知りました。木とか水とか、そういう自然の感覚。「生きている」という感じね。私は仏教徒じゃないけれど、仏教の哲学は大好きですね。

立井 やっぱりアルティストですねえ。そういう考え方はクロードさんの創作に影響を与えてますか。

クロード そうですね。私はお金とかモノとか家とか、そういうもの全然興味ないね。私の近所の人も何億円も使って家を建てたけれど、その人はもう死んでるみたい。「孫までローンがある」とか云ってる。でも、私のエネルギーはそういうことには絶対使わない。すべて美術のためにある。なぜなら、彫刻は「心」を残すものだからね。

立井 それが「生きている」という証しになるわけですからね。

クロード そうです、そうです。だから今その人に、私、絵を描くことを薦めてるんです。

立井 そういえばクロードさん、プロレスラーのジャイアント馬場ってご存じですか。

クロード はいはい。この前亡くなった人ね。私、プロレスは嫌い。けど、あの人は立派な人のようですね。

立井 先日新聞を読んでいたら、ある人が彼のことを書いていてね。馬場さんは生前、プロレスを引退したら、モンマルトルに行って絵を描きながら静かに暮らしたいって云ってたんですって。

クロード おお！ 彼は自分の美学を持ってたんですねえ。素晴らしい。

立井 ねえ。芸術というものにはそういう力があるんですね。

クロード この前、彫刻で86才のおじいちゃんの顔を作りました。話をしていたら、その人は長生きしてるのに幸せじゃないって云う。自分はやりたいことをしてこなかった、だから満足してない。死ぬのが怖いって。そういうのを聞くと寂しいですね。何か自分の世界を持てればよかったのにね。

立井 クロードさんは、もし神様から「お前は明日死ぬ」って云われたらどうですか。怖いですか。

クロード まだまだやりたいことはあるよ（笑）。でも、本当に云われたら「わかりました」って云います。私の人生、トレコンターン（満足）です。とても幸せね。

立井 そうですか（笑）。ところで、ひとつ質問を。さっきから気になってたんですが、クロードさんは僕からエネルギーを感じますか？

クロード あるある！ 感じるよ（笑）。

立井 そうですかぁ？ 自分ではもっと欲しいと思ってるんですけどねえ。

クロード 感じてなかったら、こんなにたくさん話しない。アナタ、エネルギーあり過ぎですよ（笑）。

■オーナーのクロードさんを囲むスタッフの皆さん。この店独特の居心地の良さは、クロードさんのセンスも然ることながら、スタッフの皆さんの人柄によるところが大きい。3人だけなので大忙しだが、穏やかな笑顔を決して絶やさない。

■一見、可愛らしい喫茶店のような店構えの「サロン・ケベクア美容室」。実際、間違えて入ってくる人も多いとか。外装、内装ともに木の風合いを生かし、独特の暖かみがある。特に内装のほとんどはクロードさん本人が自ら手掛けたという。

真味百撰 ㉓

Casual Restaurant ラ・バンバ

柴崎町2-3-3／524-5800
11:30（ランチは14:30まで）～22:30／月曜定休

中南米料理と本場の音楽で
本格異国情緒を気軽に味わえる
わが街の「エスニック」といえば

至八王子　立川駅　至新宿　南口　シャノアール　公園　立川南駅　ラ・バンバ

表向き「エスニック料理」を標榜する店は多いが、独自の世界をつくり出すまでに至る店は少ない。まして専門店が育ちにくいといわれる立川にあって、今年開店9年目を迎える『ラ・バンバ』の存在はひときわ大きいものがある。

店主の井上雅男さんが料理の世界に入ったのは約30年前。フレンチから入って、南欧料理など多くのジャンルを手掛け、この店を開く前は、なんと錦町の『至誠ホーム』で腕を振るっていたという。さらに中南米文化との出会いは、ホームで開かれたアンデス音楽の演奏会だった。元々音楽好きの井上さんはその魅力に参り、気がついたら生活や文化に至るまで、一端の「南米通」になってしまった。そして自身の嗜好と料理を併せた店を開くことを決意。平成2年10月に開店となった。最初はやはり悪戦苦闘。しかし3年目を過ぎた頃から井上さん以上の「通」が通い始め、今では客同士の交流も盛ん。平成7年には店が主催して、初の南米ツアーを挙行した。「お客様に育ててもらっている」と語るが、井上さんの異文化への深い愛情と洞察がもたらした結果には違いない。

セビィチェミクスト（ペルー風魚介のマリネ・￥840）、アンティクーチョ（牛ハツのアンデス風串焼・￥1,250）などがお薦め。少しづつたくさん注文して、皆でワイワイやるのが本場の楽しみ方とか。毎週金・土には本場のミュージシャンによる生演奏も行われている。

東風

えくてびあんは「立川文化」「立川文化」と姦しいけれど、北口広場にある彫像『足を組む女』（笹戸千津子作品）の現状を知っているのか。あれで、なにが「立川文化」なのかというお叱りを読者から受けた◆その像は裸像で、脚にたばこの吸い殻を挟んだり、頭に新聞紙でこしらえた帽子を乗っけたりと悪戯が激しいので、取り外して現在は台座だけが淋しそうに北風に吹かれている。悪戯にしては、タチが悪すぎやしないか◆この像は東京立川ロータリークラブによって寄贈されたが、このクラブに限らず、文化都市・立川をめざしているグループ、個人はたくさんいる。たとえば立川市地域文化振興財団ではコミュニティ奨励賞を設け、毎年、文化芸術活動奨励賞、スポーツ活動奨励賞など、功績を残した方、また優れた記録で市民の励みになってきた方などに贈られる賞が三月にある◆人はもしかすると、文化面に勢力を傾ける時と、その反対の方向、少し荒っぽい云い方をすれば「蛮行」に走る時と、一個人のなかでもその両面を持っているのかも知れない。前者に力を注いでくれるのが、本来「教育」というものだったのだろうが、受験戦争の激化で二の次にされてしまった。十五万の個性が集まって、市としての「個性」をプラスの方向へ表現してゆく。私たちは今、プラスとマイナスの分岐点にいるのだろうか◆春風に仁王の憤怒　えくてびあん

月刊えくてびあん 第176号
平成十一年三月一日発行
発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F 〒190-0012
電話 〇四二(528)0082
FAX 〇四二(528)0065
編集発行人 立井啓介
印刷所 ㈱大廣社

（表紙）石綿「内裏雛」久住由美
（編集）池田陽男 小林康史 内藤裕子 名尾昌真
山田恵子 大久保清志 新井紀美子
（写真）加藤正嘉 五茶孝宇

たみ子さんのうた

7

詩・清水たみ子

画・坂口節子

夕日のお部屋

夕日のお部屋の、おばあさま、
とてもさみしそ、前かゞみ。

お背中むけてるガラス戸に、
寒い夕焼うつります。

壁に木の影ゆれるので、
風も出たな、とひとりごと。

夕日のお部屋の、おばあさま、
からからなつてる桐の實よ。

昭和七年「赤い鳥」三月号より